

覚書 <「理想数」と「理想素因子」という数学用語について>

従来、日本の数学界が E・E・クンマーの *idealer Primfactor* をおおむね「理想素因子」と翻訳し、また R・デデキントの *das Ideal* をしばしば「理想数」と翻訳してきたことは、動かしようのない事実である。多くの数学書を閲覧すれば、またコンピューター上で検索を試みれば、容易にその事実を確認することができる。

しかし私見によれば、「理想素因子」や「理想数」はいずれも元のドイツ語の誤訳であって、本来それらは「観念的素因子」や「観念数」と訳すべきものである。ただしそう考える数学的・語学的な理由はすでに他所で述べたので、ここでそれを繰り返すことはしない。

私に関心を寄せるのはむしろこの誤訳の「背景」である。そこに複数の要因が絡むことは想像に難くないが、明治期から大正期にかけて日本で欧米の思想書の翻訳が進行するなかで、数学に限らず、一般に英語またはドイツ語の“*ideal*”にどんな日本語があてがわれてきたか、という歴史的経緯が議論の前提になることは間違いない。ただしこの場合、英語またはドイツ語の“*ideal*”それ自体が「両義的」な言葉であったという事実が、日本におけるその訳語の成立過程を複雑にしている。

周知のように、英語またはドイツ語の形容詞 *ideal* は、それ自体、「価値論的」な側面と「存在論的」な側面を併せ持つ言葉である。たとえば *ideal husband* はもちろん「望ましい夫」を意味することがあるが、しかし、価値中立的に、或る女性が「抽象的に思い描いただけの」（だからもしかすると碌でもない）男性像の意味で使われる可能性もなくはない。また私は以前 *ideales Ausgleich* というドイツ語表現を見たことがある（ただその文脈では *Ausgleich* は貶めて「妥協」の意味で使われていた。）私の言語感覚では、「理想的妥協」はグロテスクで常軌を逸した気持ちの悪い言葉遣いに見えるが、対して「観念的妥協」は、「現実的条件を考慮しない、頭でっかちの辻褃合わせ」という意味でなら、言葉として立派に通用する。このように *ideal* という言葉は、現代日本語で表現すれば、「理想的」と「観念的」という二重の意味をあわせ持つ言葉なのである。

明治大正期、*ideal* という言葉に日本語を対応させる任に当たった当事者は、この言葉の二面性が頭になるのに応じてそれに対応しようと努力したはずであり、その結果、最終的に「理想的」と「観念的」という一对の日本語が整備されたのである。ただしそこには紆余曲折があったのであって、この小文はその経緯を「数学」において確認する意図で書かれている。

以下、年次は基本的に元号で表記する。

[1] 高木貞治の場合

さてクンマーの idealer Primfactor に最初に「理想的」という形容詞を当てたのは高木貞治(明治8年～昭和35年)ということによいのだろうか。さまざまな背景(数学的実績、東京帝国大学教授という身分、活発な出版活動と社会貢献など)を勘案するとその可能性が非常に高いのだが、この辺り、実は私は事実関係の最終確認が取れないでいる。さて、もしこの仮定が許されるなら、彼は本格的な論文はおそらく欧文で書くだらうから、「理想素因子」の登場は彼の日本語での数学教科書あたりと推定され、そうすると最初の使用例として浮上するのは昭和6年(1931年)の『初等整数論講義』(共立社出版)の次の箇所である(第5章、§41)。

「Kummer は大胆な着想によってこの困難な局面を打開することを試みた。彼は上記(8)、(9)の如き分解はまだ分解の終局に達しているのではないことを看破して、いわゆる「理想的の数」(Ideal number)の理論を組み立てたのである。・・・しかしながら、2,3,7などが実際には分解不可能であることは前に述べた通りであるから、 A, B', B, C', C などは $K(\sqrt{-5})$ の中に現実に存在する数ではない。故に複素数をかつて「想像的の数」(imaginary number)といったのにならって、「理想的の数」というような語を用いたのである。」

高木のこの文章には「わかりにくい」部分がある。実際、彼は件の数を一方で「理想的の数(ideal number)」と呼び、さらにこの命名を文章の末尾では「想像的の数」(imaginary number)に準えている。しかし先般の分類に従えば、現代日本人の耳にとって、前者は嫌でも価値論的に(つまり「あらまほしい」という意味で)響き、後者は存在論的に(つまり「想像的」=「非実在的」という意味で)響くのではないだろうか。微妙ではあるが、どこかに価値概念と存在概念の不整合がありはしないか。

もう一つ不可解なことがある。たしかに高木はクンマーの ideal を「理想的」と訳すけれども、彼は何かデデキントの例の概念はかならず(?)「イデヤル」と呼ぶのである。ということは高木は ideal を「理想的」と最初に訳した人物であると同時に、この日本語を最初に遠ざけた人物と言えるのかもしれない。何か不安的なものがあるように感じる。高木は本当にこの「理想的」という訳語に、絶対的な自信を持っていたのだろうか。しかし高木をめぐるこの論点はいったん脇に置く。

[2] 歴史的事実関係

日本語で「観念的」と「理想的」という対立概念が成立する過程は、おおむねこうであったと聞く。

(a) [西周] 明治8年から9年にかけて、西周によって、アメリカの心理学者 Joseph Haven

の著作“Mental Philosophy”(1869)が、『ヘヴン氏心理学』の表題で訳出される。ここで観念的/理想的の観点から重要なのは以下の事柄である。まずこの訳書では名詞 Idea は「観念」と訳され、それは一般に「心の中にあるもの=想」を意味するとされが、この場合、次のことに注意すべきである。たしかに『ヘヴン氏心理学』には the Ideal という言葉 (the+形容詞) が登場するけれども、それはあくまでも the Actual の対立語として登場している。したがってこの ideal は「理想」ではなく、あくまでも「現実的なもの(the Actual)」に対立する存在概念、すなわち「観念的(ideal)」の謂なのである。

確認する。西周における ideal は「観念的」の謂である。

(b) [哲学字彙] 明治 14 年、日本で最初の欧日対照の哲学辞典、『哲学字彙』(東京帝国大学) が井上哲次郎たちによって編まれている。おそらく西周の『ヘヴン氏心理学』の影響を受けつつ、初版(明治 14 年)における ideal 関係の記載はこうなっている(以下、下線は金田)。

「Idea(観念) / Ideal(理想) / Idealism(唯心論)」。

さらに明治 17 年の改訂増補版『哲学字彙』では記載に若干の変更がある。

「Idee(観念・理想) / Ideal(理想的・観念的) / Idealism(唯心論)」。

『哲学字彙』第三版については後に譲るが、初版と改定増補版で難しいのは下線を付した「ideal (理想的)」の箇所である。この初版の字句を見れば、またその改定増補版を見るときとなおのこと、そこでは ideal が価値概念として扱われているとつい言いたくなるだろう。改訂版で「理想的」が・によって「観念的」と対立させられていることが、そのような解釈を誘うのである。しかし待て。もし「理想」という日本語それ自体が「観念」という意味で使われていたとすれば、話は別ではないだろうか？ ここにそもそも対立がないとしたら、話は別ではないだろうか。というのは・・・

(c) [没理想論争] 明治 24 年から 25 年にかけて、森鷗外と坪内逍遙の間で「没理想論争」と呼ばれる論争が行われた(ちなみにこの年は改訂増補版『哲学辞彙』刊行の 7 年後に当たると)。逍遙は「早稲田文学」に掲載した「シェークスピア脚本註釈」のなかで、「理想」という言葉に「世界観」という意味を込めながら、シェークスピア作品の卓越性を、それが個別の人が抱く個別の世界観の表現ではなく、むしろシェークスピアの作が「如何やうにも解釈せらるること」に置いたのである。「彼が傑作は殆ど万般の理想をも容れて余りあるに似たり」、「其の作には何人の面も映るなり」、「如何なる読者の理想も其の影を其の

中に見出すことを得べし」。この見解はシェークスピア作品の価値を、まさにそれが多様な解釈(世界観=理想)に対して開かれていることに見る点において傾聴に値するが、鷗外は「越える」を意味する「没」を「否定する」の意味に捻じ曲げ、また「没理想」を「超越的規範の否定」と曲解した挙句、おとなしい逍遙を「帰納的批評」を顕彰する輩として上から目線で痛罵したのである。(そのあと逆に、鷗外は気性の激しい高山樗牛に痛烈批判されて審美学領域から撤退する羽目になるのだが、その経緯については谷沢永一、『文豪たちの大喧嘩』、新潮社、2003、を参照されよ。)

さて鷗外と逍遙の「行き違い」からわかるのは、当時まだ「理想」という日本語が、一方では逍遙のように存在概念としての「観念」を、他方で鷗外のように価値概念としての「(今の意味での)理想」を意味し、言葉がこれら二つの意味の間を揺らいでいたことである。逍遙は存在概念(世界観)の意味で、鷗外は価値概念(規範)の意味で、それぞれ「理想」という言葉を使ったのだが、両者がこの齟齬を認識し相互の誤解を解消できるまでにはなお数ヶ月を要したのである。

確認する。1890年代、「理想」と「観念」はまだ分離不徹底、いわば「揺らぎ」の状態にあった。

(d)[明治45年] 最終版、『英独仏和 哲学辞彙』となると、記載は次のように充実の度を増す。

「Idea(表象・観念・理想) / Ideal(理想・観念) / (形容詞) ideal(理想～) / Idealism(唯心論) / idealist(唯心論者) / Idealität(観念性) / idealization(理想化) / ideation(観念力) / Idee(観念・観念連続過程)」

最初の「Idea(表象・観念・理想) / Ideal(理想・観念)」は過去の未分化状態の痕跡を残しているように見える。しかし「改訂増補版(第二版)」とこの「英独仏和版(最終版)」の差異を際立たせるのは、最終版の「(形容詞) ideal(理想～)」および「idealization(理想化)」という記載である。私の目にこれは、成熟した価値概念に見えるのである。

もう一つ、最終版には、形容詞 ideal に訳語「理想～」はあっても訳語「観念的～」がないのが引っかけだが、周辺には Idealität(観念性)や ideation(観念力)が姿を見せているのだから、形容詞「ideal(観念的～)」の登場は時間の問題であったろう。

確認する。この時期(1912年)、ideal をめぐって、たしかに価値概念「理想」は勢力を拡大しつつあったが、「理想」と「観念」の棲み分けはまだ不徹底だった。いや、順序を逆にしてむしろこう言うべきか。この時期、ideal をめぐって「理想」と「観念」の棲み分けはまだ不徹底だったが、価値概念「理想」は着実に勢力を拡大しつつあった、と。

(e)大正3年(1914年)に決定的な出来事が起こる。天野貞祐・桑木巖翼によるI・カント『プロレゴメナ』の日本語訳の刊行(東亜堂)がそれである。周知のようにカントは非常に正確な言葉遣いをする哲学者であり、彼の著作の翻訳に従事する者は日本語の訳語選択に神経質とならざるを得ない。天野・桑木はIdeeという言葉に「観念」を当て、また文脈に応じては哲学字彙になかった「理念」でこれを補い、そしてこれらと区別すべき「神学的理性理念」に限定して「理想」という語を当てたのである。大正期に至ってようやく「観念、理念」と「理想」の三者が出揃い、言葉の安定使用のメドが立ったことがわかる。

確認する。大正3年に存在概念「観念、理念」と価値概念「理想」が日本語で一応の分離を成し遂げた。

[3] 高木再論

そこで最初の考察に戻ろう。高木はどうしてクンマーの *idealer Primfactor* を「理想的素因子」と訳したのだろうか。裏を返せば、高木はどうしてそれを「観念的素因子」とは訳さなかったのだろうか。

しかし自分でこんな問いを出しておきながらこんなことを言うのも変だが、高木は本当に特定の理由があって「理想的」と言う訳語を選択したと言えるかどうか、実を言うとかなり怪しい。なぜなら彼は『代数学講義』(昭和5年、共立社書店)の凡例5にこう書くからである。

「学術用語の国訳は現今一定になっていない。本書の用例は全て暫定的である。著者の意見は学術語の国際的であることを第一として、用語の妥当性を第二におくのであるから、なるべく直訳式に一言語に対して一邦語を目標とした。例えば *primitive* はいつでも「原始」、*irredicible* はいつでも「既約」など。」

この文章は高木が日本語の訳語選択にかならずしも神経質でなかったことを物語っている。「学術語の国際的であることを第一として」という文言は要するに、「たとえば理想的という日本語が出てくるたびに、その日本語の意味には拘泥せず、自動的に *ideal* という国際語(つまりドイツ語)に脳内変換してほしい」、という意味に聞こえる。当時、旧制高校生や大学生たちが日常的にドイツ語を乱発する気風に染まっていたことを考え合わせると、数学の勉強においてはドイツ語が基本であり、日本語は補助的な道具であるという意識がここに垣間見える。(ちなみに『代数学講義』の巻末には詳細な英独仏の用語対照表が添付されている)。しかも「本書の[日本語の]用例は全て暫定的」とあるから、訳語に不都合が起こればそれはそのとき考えようというスタンスであるらしい。随想などの書きっぷりから判断して、高木には洒脱というかノンシャランなところがあるようにも見える

が、訳語の選択も例外ではなく、用語の選択も便宜的に考えていたようである。

さて「(邦語の)用語の妥当性は第二におく」と言われると、西周や井上哲次郎や森鷗外や天野貞祐まで動員して語義を詮索するのは馬鹿げているという気もする。しかしどうだろう、本当に人間は言葉を支配していて、不都合があれば適宜言葉を差し替えるなどといった芸当ができるものだろうか。人が言葉を支配しているのではなく、言葉が人間を支配している疑いはないのだろうか。

時間的順序から判断して、昭和6年(1931年)の高木貞治は、前項[2]に挙げた(a)から(e)の一連の事項を知りうる立場に立っていたはずである。高木の言語使用を規制していたのは、(e)の天野・桑木の語法だったのだろうか。天野と桑木の努力による、分類概念 ideal と価値概念 ideal の弁別からすでに17年が経過し、当時、言語使用はかなり安定していたはずである。だから彼は、ドイツ語 ideal を正確に理解しつつ、それを「観念的の数」と訳すことも、その気になればできた道理である。まして高木貞治と桑木巖翼は同じ大学の同僚だったから、桑木に敬意を表して「観念数」を選ぶことは儀礼にも適っている。でも彼はそれをせずにあえて後発の言葉、「理想数」を選んだ。何故だろうか？

高木の言語使用を規制していたのが(c)の森鷗外だとしたらどうだろうか。「没理想論争」が耳目を集めたことは事実だし、高木がそれを知らなかったとは考えにくい。しかし高木と森の交渉という話を私は寡聞にして知らない。だからこの論点だけは如何ともし難い。

高木が a)から e)のどの意味で「理想」という言葉を使ったのかという設問には、おそらく答えがない。歴史的偶然が排除できないこと、情報の絶望的な欠如がその理由である。だが高木を動かしたのが「語義」ではなく、言語使用の「身振り」だと考えてはどうだろうか。彼が「理想数」という言葉を「身振り」として選んだと考えたらどうなるだろうか。

[4] 新理想主義

大正時代の日本において、ドイツの「新カント派」は「新理想主義」とも呼称されていた。ノーベル文学賞を受けたルドルフ・オイケン(Rudolf Eucken)が花形であり、桑木巖翼にもオイケンの翻訳がある。さまざまな学問分野で「新理想主義」が花開いた大正時代だが、昭和に入ると「理想主義」は急速に政治化したのだった。その代表が東京帝国大学教授、河合栄治郎(1891-1944)であって、彼の著作『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』(日本評論社 1930)からは、この時期、idealism という言葉がいわば「政治的再吟味」にかけられていた状況をつぶさに読み取ることができる。イギリスにおいては「功利主義/経験論」への対抗手段として、またドイツにおいては「社会主義/唯物論」への対抗手段として、idealism は新たな改鑄を要したのである。だがこの改鑄は不可避免的に、改鑄以前の

idealism と改铸以後の idealism の間に分裂を引き起こすだろう。河合の次の言葉ほど、「観念的」と「理想的」の政治的断絶を先鋭に語る言葉はない。彼は言う、「観念論的(ideal)認識論を採ると云うだけでは、未だその人が理想(ideal)主義者に種別されるか否かは疑わしい」と (ideal の挿入は評者)。

高木貞治の『初等整数論講義』の刊行は翌 1931 年のことである。それは満州事変の年であり、その先には五・一五(1932)と二・二六(1936)と平賀肅学(1938)が待っている。さらに高木は数度にわたって渡欧したが、1932 年 9 月のチューリッヒ滞在の直前の 7 月には、ドイツの議員選挙においてナチスが第一党に躍り出たことも知っていたろう。当時、誰もが「理想」を語っていたのである。オイケンも、グリーンも、河合栄治郎も、そして五・一五も、二・二六も、ナチスも、シオニストも、誰も彼もが「理想」を語っていた。「生きる」と「理想を持つ」は政治的に同義だった。それはよき未来を約束する希望の言葉だった。

「理想」という小さな新語を数学書に忍び込ませることを「政治的」身振りと呼んでよいのなら、高木はこれとよく似た政治的身振りをもう一回とっている。彼は 1949 年に『数学の自由性』という随想集を出したが、これについては表題と内容の齟齬がよく言われる。「数学の自由性を語るのは巻頭の文だけであり、それ以外は表題と無関係だ」という苦情がそれである。それは確かにそうなのだが、ほんの 5、6 年前なら、このような表題 (自由性) を持つ本を刊行すれば社会的に痛い目にあつたことを想ってもみよ。「数学の自由」は「日本社会の自由」の言い換えではなかったか。その政治的心情は測り難いが、高木はおそらく (彼なりの仕方) で新生日本に寄り添っている。この書物の真率な表題と、ときに躁? を疑うほどに軽妙洒脱な内容は、ともに新時代の到来への彼の不器用な笑顔だったかと思わないでもない。(私は高木貞治の政治性を主張しているのではない。どんなおとなしい人間でも、大事にしている蔵書をすべて焼かれたらそりゃ怒るだろうし、その原因を激しく憎むだろうと言っているだけである。)

結論はこうである。高木貞治はどうやら数学をドイツ語で思考しているようであつて、日本語に対しては「二次的で暫定的な手段」という位置付けしか与えていない。したがって例えば「理想的」という言葉に特に深い思想を込めたと考えるべきではなく、それに特段の美的(?)な思い入れがあつたとも見えない。高木は良い意味で即物的な思想家であつて、原語に充てられた日本語に不都合があれば、適宜、変更を加えれば良いという主張は傾聴に値する。最近、「すべての数は理想数だ」みたいな怪文章が一部で出回っている。「理想」という曖昧な言葉はやめて、形容詞 ideal は「イデアルな」、名詞 Ideal は「イデアル」とするのが適切だと思う。

2023.3.5. 金田千秋